

## 袁枚の女弟子歸懋儀の生涯とその文学

蕭, 燕婉

臺灣中山醫學大學 : 助理教授 | 台湾中山医学大学 : 助理教授

<https://doi.org/10.15017/9588>

---

出版情報 : 中国文学論集. 34, pp.74-88, 2005-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 袁枚の女弟子歸懋儀の生涯とその文学

蕭 燕 婉

歸懋儀（一七六五<sup>1</sup>）は清朝乾隆嘉慶期に活躍した袁枚女弟子の一人である。彼女はまた上海の役人李廷敬にも師事し、陳文述、洪亮吉、龔自珍など多くの名士たちと交遊があり、袁枚の弟子孫原湘、陳基とは文字の交わりを結んでいた<sup>2</sup>。そればかりではなく、閨秀詩人の錢孟錕、王倩、席佩蘭及び陳文述の女弟子吳藻、張襄、陳文述の子、裴之の妻汪端、龔自珍の妻沈吉雲は、皆彼女の詩友であり、その詩名は江、浙に鳴り響いていた。彼女は嘉慶・道光年間を通して、『繡餘小草』、『繡餘續草』、『再續草』、『三續草』、『四續草』、『五續草』、『繡餘近草』、『聽雪詞』、『繡餘餘草一卷尺牘一卷』など、相当な量の著作を遺している。

彼女の著作は、筆者の調べた限りでは、『繡餘續草』が上海図書館に所蔵され、『繡餘餘草一卷尺牘一卷』が台湾の中央図書館に収められている<sup>3</sup>。上海図書館所蔵の『繡餘續草』には、饒慶捷をはじめ二十五家の題詞が付されており、当時は多くの人に読まれたに違いない。本論稿は、袁枚の女弟子たちの面影や著作のあらましを、少しでもよりリアルに現代に蘇らせるために、主として上に挙げた二つの著作を中心に歸懋儀の文学の特徴を探り、また、彼女の袁枚や李廷敬との師弟関係及びその文学のあり方について考察するものである。更に、清代女流文学史において彼女がどのような評価を受けていたのかについても検討を加えたい。

歸懋儀、字は佩珊。江蘇省常熟の人。幼きより吟詠に耽り、詩詞のほか書画、刺繡にも秀でていた。官、浙江布政使に至った歸朝煦むすめの女である。母李心敬は上海の閨秀詩人で、若くして亡くなった。歸懋儀のおじ李心耕が彼女と母の詩を合刻して、『二餘集』と名付けて出版している。歸懋儀は李心耕と楊鳳妹の息子李學璜（復軒）に嫁いだ。姑の楊鳳妹も閨秀詩人で、著に『鴻寶樓詩稿』があり、夫も在野の文人であったので、彼女は文学的な家庭環境の中に居たわけである。歸懋儀は「疊韻答外」（『繡餘續草』）において「廿載蓬廬況 相依書卷中」（廿載 蓬廬の況、相依る 書卷の中）と詠じていることから、夫婦共に金銭に淡泊で、ひたすら文人生活を楽しんでいたことが分かる。

『繡餘小草』、『繡餘續草』などといった書名を見るだけでも、針仕事をしている傍らにいつも書物を置いて、仕事の合間に読み耽ったり、筆を執ったりする女性の姿が、すぐに浮かんでくるだろう。そもそも伝統的な「男は外を主り、女は内を主る」式の家庭分業においては、男性は学問に励み、功名を得、家を継承していく一方で、女性は嫁ぎ、紡績、食事の支度をする、といった役割が定められていた。しかし、清代文化の爛熟地帯たる江南に生きた教養のある女性たちは、「女性に相応しい領域」に女性を閉じこめようとする社会的圧力にとられず、伝統的な性別による分業の枠を越え、その時代における最も充実した生き方を積極的に追求しようとしていた。まさに「集名倦繡、針神原是餘事」と言われているように、閨秀詩人歸懋儀の生活の重心は、裁縫の余暇としての執筆活動にあったことは明らかである。胡文楷の『歷代婦女著作考』による限りでは、『繡餘』と題する著作は五十ほどに及んでいる。したがって、学問・技艺が女性に開放された自由な雰囲気の中にあつた清の乾隆嘉慶期の女性たちは、ひたすら家事に専念する女性から脱却して、次第に語る主体としてのアイデンティティを確立しつつあつたと思われる。

歸懋儀は特に詩の中で、自己の自分が著作に励む閨秀詩人にあることを示した。例えば「秋宵即事」（『繡餘續草』）

袁枚の女弟子歸懋儀の生涯とその文学

に「年来事事消除盡、結習難忘只有詩」(年来 事事 消除し尽し、結習忘れ難きは 只だ詩有るのみ)とある。また「病起」(『繡餘續草』)には「今宵應被燈花笑、依舊紅牕照苦吟」(今宵 窓に灯花に笑わるべし、旧に依りて紅牕 苦吟を照らす)とあることから、彼女はしばしば讀書と創作を自己表現の主題とし、自分の価値は作家という職分にあることを積極的に伝えようとしたことが分かる。

ところで、以上掲げた詩句に言つように、歸懋儀は夜が更けるまで一体何を讀んでいたのか。言つまでもなく、彼女は袁枚の女弟子だから、袁枚の著作には精通してはたはずである。その他に、兵法、騎射を善くした張襄(陳文述の女弟子)の著作にも彼女は目を通しており、『繡餘餘草』に「題蒙城張雲裳女士錦槎軒詩稿」という詩四首が残されている。また『繡餘續草』に「詠菊十二律」があり、憶菊、訪菊、種菊、對菊、供菊、咏菊、畫菊、問菊、簪菊、菊影、夢菊、殘菊といった詩題が、『紅樓夢』第三十八回にある「菊花詩」と同じことから、歸懋儀は天才少女たちの哀艶な生涯が織りなされた恋愛物語『紅樓夢』をも確かに讀んだことが推測できる。

更に彼女は陳端生(一七五二—一七九六)の弾詞(韻文の語りもの)『再生緣』をも閲覽している。『再生緣』は男装して正体を隠し、皇帝の命令に反抗し、父母を叱責し、舅や夫を跪かせるヒロイン孟麗君の物語である。『繡餘餘草』に「題再生緣傳奇」五首があり、其の一は次のように詠う。

合歡花向筆端開 雅調新翻出玉臺 合歡の花は筆端に向かつて開き、雅調 新たに翻して 玉台を出づ  
 世上良縁多缺陷 補天斂費女媧才 世上の良縁は缺陷多く、補天 斂費す 女媧の才

また、吳藻(一七九九—一八六二、陳文述の女弟子)のために「題吳蘋香夫人飲酒讀騷圖」(『繡餘餘草』)二首を作り、其の一で吳藻を「不櫛書生」と賛美し、彼女の才能を大いに称揚した。

離騷一卷寄幽情 樽酒難澆傀儡平 離騷の一卷 幽情を寄す、樽酒 澆ぎ難し 傀儡の平らかなるに  
 烏帽青衫鐙影裏 共看不櫛一書生 烏帽 青衫 鐙影の裏、共に看る 不櫛の一書生

『飲酒讀騷圖』(曲)は一名を「髡影」という雜劇であり、吳藻が彼女自身の不遇を男装した謝絮才に仮託して嘆じた物語である。

陳端生と吳藻の創作した個性的で魅力溢れる通俗文学に、歸懋儀は強い共鳴を覚えていたに違いない。このよう

に彼女が、卓越した才能学識を抱きつつ、男性と競争する機会を与えられない女性の運命や前途に深い関心を寄せていたのは、女流詩人としてのアイデンティティを求めようとしていたからにほかなるまい。男性より優れた知性を持つ女性が描かれた文学作品を高く賞賛するのは、歸懋儀が従来の文学觀念において上位におかれていた士大夫、男性、文言などに対して、その正反対にあるものの価値を強く認識したものと見えよう。

歸懋儀のちに江蘇・浙江の間を往来して、閨塾の師となり、生活費を稼いだ。<sup>10</sup>『明三十家詩選』を編纂した優れた閨秀詩人汪端は、「秋夜寄佩珊」(『自然好學齋詩鈔』卷八)において、歸懋儀を明末清初の才女黄媛介に見立て、二人の生き方は何と彷彿としていることかと感嘆した。

前身合は黄皆令、垂老窮愁託詠歌、一語寄君須自愛、掃眉才子已無多(前身は合に是れ黄皆令なるべし、老いに垂として、窮愁、詠歌に託す、一語、君に寄す、須らく自愛すべし、掃眉の才子、已に多くは無し)。

明末の嘉興の才媛黄媛介(皆令)は楊世功に嫁いだが、生活が貧しかった。優れた才能を持っていた彼女は、錢謙益・柳如是夫婦や毛奇齡、紹興の祁彪佳の妻であった商景蘭としばしば詩文の唱和をしている。そして呉越の間に往来して、自分の詩文を販売することで生計を立てたともいう。<sup>11</sup> 歸懋儀も黄媛介と同じく夫より優れた詩才の持ち主で、一家の生計を助けるために、「内人」という枠組みをとびだし、かなり有為転変のある生活を体験したものと見られる。

## 二

生計を立てるために東奔西走し苦勞を味わった歸懋儀の詩には、家に対する思いや孤独感が溢れている。たとえば、彼女は「琴川」(『繡餘續草』)において、故郷虞山をゆく舟旅の感懷を次のように詠つ。

十年南北等浮漚 重作虞山十日遊 十年 南北すること 浮漚に等し、重ねて虞山十日の遊を作す<sup>12</sup>  
煙裏櫓聲驚短夢 霜前雁影動新愁 煙裏の櫓声 短夢を驚かし、霜前の雁影 新愁を動かす  
人家斷續斜陽外 喬木蒼涼古渡頭 人家は断続す 斜陽の外、喬木は蒼涼たり 古渡の頭

袁枚の女弟子歸懋儀の生涯とその文学

百里江天迷望眼、蕭蕭蘆萩起沙鷗 百里の江天 望眼迷い、蕭蕭たる蘆萩に 沙鷗起つ

舟に身をゆだねた孤独な作者は、櫓を動かす音と眼前の雁に郷愁を掻き立てられる。ここには、琴川を下つていく景色とそれに伴う内心の変化とが細かく描かれている。尾聯では、広々とした河の上空を見てより小さく感じられた自分を、蘆の中から飛び出した鷗の姿に重ねることで、作者の孤独感とやるせなさを更に突出させている。風景描写の中に細やかな感情が投影されているところに、閨秀詩人ならではの優れた手腕が見られる。

歸戀儀が頻繁に江、浙に漂泊したのは、実はやむを得ない事情によるものだった。「客中雨夜無寐寄小韞」(繡餘餘草)の中で彼女は、夫の不遇や経済的困窮といった悩みを抱えつつ、病身で旅の空を彷徨う哀しみを、友人汪端(字は小韞)に切々と訴えている。

又是吳江楓落天 又是れ吳江楓落の天

擁衾聽雨不成眠 衾を擁し雨を聴き 眠りを成さず

暮年作客原非計 暮年 客と作るは 原と計るに非ず

末路求名亦可憐 (外子猶復俛首帖耳) 末路 名を求むるは 亦た憐むべし (外子は猶お復た首を俛し耳を帖す)

遙夜鄉心易根觸 遙夜には 郷心 根觸し易く

入秋衰病倍纏綿 秋に入りて 衰病は倍ます纏綿たり

知卿亦抱幽憂疾 知る 卿も亦た幽憂の疾を抱き

終歲叢殘手自編 終歲 叢殘 手自ら編むを

首聯では一晩中眠れず、秋雨の音に耳を傾ける深い孤独感が印象的である。第四句の注にいう「俛首帖耳」とは、頭を垂れ耳を垂れて媚び諂うの意味で、韓愈「應科目時與人書」(韓昌黎文集 卷三)の「若俛首帖耳揺尾而乞憐者、非我之志也」を踏まえた表現である。憐れみを乞う夫のイメージは、文筆によつて身を立て、不屈の精神を持つ歸戀儀の気骨とは著しい対照をなしている。流浪の風塵に幾たびも苦勞を重ねた漂泊老残の身の辛さは、同じく鬱結した胸懷を抱き、『明三十家詩選』を編集した才女汪端ならば、よく理解してくれるだろうというのである。

このような歸戀儀の坎坷不遇の生き様について、汪端は「琴川歸佩珊夫人戀儀 過余白環花園、酌酒焚蘭、言歡

竟夕、且出示所著繡餘續草、因書四律於卷首奉答見贈之作」その三（『自然好學齋詩鈔』卷二）において、次のように述べている。

質無皋橋又幾年 歌離弔夢亦辛酸 廡を皋橋に質りてより 又幾年ぞ、離を歌い夢を弔い 亦た辛酸す

女蘿古屋青澹澹 修竹閒庭翠袖寒 女蘿の古屋 青澹澹たり、修竹の閒庭 翠袖寒し

鸞鳳無心憐瘦鶴 葦施何事妬芳蘭 鸞鳳は 瘦鶴を憐れむに心無く、葦施は 何事ぞ芳蘭を妬む

才人自昔悲遭際 莫恨蛾眉稱意難 才人 昔より遭際を悲しむ、恨む莫かれ 蛾眉の意に称うこと難きを

この詩を読めば、深い孤独に耐えながら自己の運命と格闘し続けた力強い歸戀儀のイメージが浮かび上がってくるだろう。皋橋は江蘇省呉県の閶門内。首聯は借家住まいで辛酸を嘗め尽くした歸戀儀の生活を描いたものである。第四句は杜甫「佳人詩」の「天寒翠袖薄、日暮倚脩竹」という句を踏まえて、杜甫の描いた俗塵を洗い落とした孤高の佳人の姿と歸戀儀を重ね合わせ、彼女の高潔なイメージをより一層際立たせようとしたもの。尾聯において、汪端は深い感慨を込めて、不遇不平の人物たちの延長線上に彼女を位置づけることで、逆境におかれた歸戀儀に元気を奮い起こさせようとしたのである。因みに汪端は幼少より聡明で、晋の才女謝道韞に喩えられていた。吟詠を好み、高適庵の授業を受け「每嘆身非男子、不能盡師門之誼、以為平生憾事」（毎に身の男子に非ずして、師門の誼を尽くす能わざるを嘆き、以て平生の憾事と為す）という<sup>(1)</sup>。三十四才の時、夫陳裴之が漢皋で病死し悲嘆にくれた。汪端と歸戀儀の二人の友情の絆は、同じ困難を共有していればこそと思われる。

漂泊の旅の途中で、歸戀儀は江南の地の史跡に深い関心を示し、優れた懐古詩を少なからず作っている。たとえば、栄華と没落の象徴たる「呉宮」（『繡餘草』）を覽ては、

又是呉宮落葉時 興亡轉眼劇堪憐 又是れ呉宮落葉の時、興亡 轉眼まにして 劇だ憐れむに堪う

美人巧笑孤臣泣 試問君王屬意誰 美人の巧笑 孤臣の泣、試みに問う 君王は意を誰にか屬すと

と詠んでいる。秋風に木の葉散りゆく侘びしい呉宮を見て、彼女は春秋時代の呉王をこう問い詰める、心を寄せたのは絶世の美女西施だったのか、それとも忠臣伍員（子胥）だったのかと。これによって、歓楽に溺れた夫差を鋭く諷刺したのである。また、彼女は岳飛の祠を訪れており、「謁岳忠武祠恭和仁宗皇帝御製詩韻」（『繡餘草』）の中

では岳飛を追慕する心情を吐露しつつ、秦檜を批判している。

獄成三字太無由 難洗當年宰相羞 獄の三字に成るは 太だ由無し、洗ひ難し 当年の宰相の羞

破敵未能酬素志 報恩何暇問私讐 破敵 未だ素志に酬ゆる能わず、報恩 何ぞ私讐を問うに暇あらんや

月明北地魂難返 風撼南枝恨肯休 月は北地に明らかに 魂返り難く、風は南枝を撼がし 恨み肯て休まん

祠廟煌煌留御墨 碧天雲淨正清秋 祠廟 煌煌として 御墨を留む、碧天 雲淨くして 正に清秋

岳飛は「莫須有」というだけの罪名のために風波亭で処刑された。敵への抵抗が罪となる運命に遭った岳飛を想い、暗黒の現実に対して深い感慨を覚えてゐる。同じく不遇な立場にあつた歸懋儀の心情は、恐らく凄凉そのものであつたであらう。

以上見てきたように、歸懋儀の詩は、平易な言葉で自己の真情を描き出しており、感慨の高さという点でも優れている。また苦しい漂泊の旅の途中で詠われたものは、精緻な自然描写と深い寂寞感に彩られた独自の詩境を具えている。袁枚から最も高く評価されていた女弟子席佩蘭は、歸懋儀の著作を読んで「同聽河汾親講授、翰君獨得小倉傳」(同に河汾の親しく講授するを聴くも、君独り小倉の伝を得たるに輸す)(『長真閣集 卷五「題歸佩蘭繡餘詩稿」)と賛嘆した。席佩蘭の言葉はやや謙遜を含んだものと思われるが、その評価はやはり的確なものと思われる。

三

袁枚の女弟子王倩は『繡餘續草』に付された題詞において、「推袁御李共皈依」(袁を推し李を御し共に皈依す)と述べている。また、清・乾隆の進士陳廷慶は「袁絲以外李青蓮」(袁絲以外に李青蓮あり)という。歸懋儀がこの二人に共に師事していたことは、当時の人にはよく知られていたに違いない。では、歸懋儀はいつ頃、どのようにして、袁枚と李廷敬の門下に入ったのか。そして、その師弟関係はどのようなものだったのか。

李廷敬、字は景叔、號は寧圃、味莊。滄州の人、乾隆四十年の進士である。江蘇省江寧、蘇州の知府を歴任し、蘇松太道に抜擢された。友を好み、性格が豁達であつたため、従つ人が多く、時に吳錫麒、袁枚、王文治、祝徳麟、



洪亮吉、陳廷慶、趙懷玉、何琪、林鎬、陸繼輅など乾嘉の名士たちと詩文を唱和したといふ<sup>13)</sup>。役人生活のかたわら、彼は風雅を好む学者でもあった。

ところで、歸懋儀はいかなる経緯で李廷敬の弟子になったのか。それを知る手がかりとなる資料は少ないため、詳らかにしえない部分が多い。ただ、席佩蘭は「佩珊寄示詩集」（『長真閣集』巻五）において、「翰君得傍龍門住」（君の龍門に傍つて住むを得るに輸す）という句に「謂李味莊先生」（李味莊先生を謂つ）と注していることから、歸懋儀は上海に嫁いだ後、地縁の關係から、李廷敬に親しく接するようになったことが窺える。因みに乾隆五十七年から嘉慶十一年の間、李廷敬は上海の兵備を務めている。

そのほか、歸懋儀は「寄映藜四叔父書」（『繡餘尺牘』）に「頼味莊先生、垂念舊交、憐才破格」（さいわい頼に味莊先生の、念を旧交に垂れ、才を憐れみ格を破る）と述べている。つまり、李廷敬が常例を破つて彼女の師となったのは、古くから親しい關係にあつたからだといふのである。李廷敬との師弟關係を知る資料として、以下に歸懋儀が嘉慶二年（一七九七）に作つた「丁巳孟夏謁見味莊先生、承賜近集、并賜佳讖、恭賦五百言、用展謝忱」（『繡餘續草』）の一節を引用しておく。

前年荷賜章 珠璣照眼纈 前年 章を賜つを荷い、珠璣 眼纈を照らす

去年再題句 雅調追湘瑟 去年 再び句に題し、雅調 湘瑟を追う

從此屢賜書 褒賞口不輟 此れ従り屢しば書を賜り、褒賞 口に輟めず

薦之諸鉅老 曰斯才之桀 之を諸の鉅老に薦めて、曰く「斯の才の桀なること

尋常閨房秀 未易與頡頏 尋常 閨房の秀は、未だ与に頡頏し易からず」と

聞命意彷徨 感愧情交竭 命を聞くに 意 彷徨し、感愧 情 交こも竭く

始知文字緣 骨肉同真切 始めて知る 文字の縁は、骨肉と同じく真切なることを

「前年」とは乾隆六十年（一七九五）のことである。恐らくこの年に二人の交際關係が始まったのであろう。その時、歸懋儀は三十歳になっており、李廷敬は五十一歳であった。「荷賜章」とは、李廷敬が彼女の著作『繡餘續草』を読んで、詩を寄せたことを言っていると思われる。歸懋儀の「呈味莊師即次賜題拙集元韻」（『繡餘續草』）の後

に「又附味莊師叠韻四首」が載せられている。李廷敬はその一に「玉臺無句不驚人」（玉台、句として人を驚かさざるは無し）、その二に「荷囊有客論針神」（囊を荷う有客は針神と誦す）、その四に「工書體有垂珠妙」（書に工みにして、体に垂珠の妙有り）と詠っている。歸懋儀の文章、刺繡、書道の素晴らしい出来栄を、李廷敬は激賞しているのである。

嘉慶元年（一七九六）以降、師弟の交わりはさらに深くなった。彼女は書簡を通して李廷敬に教えを請い、李廷敬は彼女に王士禛（一六三四—一七二一）撰の『唐賢三昧集』を贈り、学問徳望のある文人に紹介している。因みに袁枚は王士禛を「一代の正宗才力薄し」（小倉山房詩集 卷二十七「仿元遺山論詩」）と評しており、否定的に見ていた面がないわけではないが、それでも「一代の正宗」であることは認めている。

さらに、陸繼輅によって『聊齋志異』の「西湖主」と「織成」の故事から取材して作られた『洞庭縁』傳奇について、歸懋儀が寄せた題詩の中に、「味莊師招看『洞庭縁』新劇」（味莊師、招いて『洞庭縁』の新劇を看せしむ）という注があることから、師弟揃って演劇を観賞し、上海の市民的文化を満喫していたことが分かる。このように、彼女が詩という文言の文学だけでなく、幅広く通俗文学に関心を寄せていくようになったのは、恐らく李廷敬の影響を受けたのであろう。

嘉慶元年に袁枚が上海の李廷敬の家を訪れた時、李廷敬は歸懋儀を袁枚に紹介しようとして、家に来てもらうことにした。あいにく歸懋儀は用事があったため、袁枚に謁見することは果たせなかった。しかし、用事が終わると歸懋儀はすぐ袁枚に会いに行つたようである。初めて会つた時、歸懋儀は自分のイメージをよく伝える「蘭皋覓句圖」を袁枚に見せ、それから弟子入りをした。その時歸懋儀は三十一歳であり、袁枚はすでに八十一歳に達していた。袁枚は「題歸佩珊女士蘭皋覓句圖」（小倉山房詩集 卷三十六）の中で、またも優秀な女弟子を獲得した嬉しさを次のように語っている。

今來小泊申江渚 曳杖隨風扣仙府 今來 小泊す 申江の渚、杖を曳き風に隨いて 仙府を扣く  
 蒙卿一見老袁絲 喜上春山眉欲舞 卿の一たび老袁絲に見ゆるを蒙り、喜びて春山に上り眉舞わんと欲す  
 自言十載奉心香 俠拜甘居弟子行 自ら 十載 心香を奉ずと言ひ、俠拜し甘んじて弟子の行に居る

一朵琪花天上落 也隨桃李傍門牆 一朵の琪花 天上より落ち、也た桃李に隨いて門牆に傍う

この後、嘉慶二年（一七九七）に彼女は袁枚の「重赴鹿鳴瓊林兩宴詩」への和詩を二十首も作り、さらにこれを巧みな楷書で呉綾に刺繡して、袁枚に奉っている。袁枚はそれに感謝する詩を残している。このようなことから、彼女が如何に自分の文章、書道、刺繡の才能を顯示し、広く賞賛を得たかを知ることができよう。嘉慶二年に袁枚が世を去った時、彼女は「輓隨園師」（繡餘續草）を作つて、哀切な心情を綿々と訴えた。「不堪下拜撫衣日、即是傳薪訣別時」（堪えざるは下拜して衣を撫ぐるの日、即ち是れ伝薪訣別の時なること）とあることから、彼女は仰ぎ慕つた師袁枚と、生涯一度しか会つたことがないことが分かる。

歸懋儀は李廷敬との師弟關係を袁枚の没後も続けている。まさに「廿載青燈千首詩、苦吟況味只公知」（廿載青燈千首の詩、苦吟の況味は只だ公のみ知る）（繡餘續草「春夜讀味莊師賜詩得四絶」と詠っているように、袁枚よりもむしろ李廷敬の方が歸懋儀のよき理解者であつたと考えてもよいだろう。

#### 四

政界、学界の有力者李廷敬と親密な交際を持ちつつ、在野文壇の大御所である袁枚の弟子ともなつた歸懋儀にあつては、文学方面での造詣はますます深まる一方であつた。名声も日増しに高くなり、同時に友人のネットワークも広がつていった。

孫原湘「天真閣集」卷二十「李安之歸佩珊夫婦過訪下榻長真閣」には「酒花香雜墨花鮮、騰笑全家盡廢眠」（酒花香り雜りて、墨花鮮かなり、騰笑して全家尽く眠りを廢す）とある。これは李學璜、歸懋儀夫婦が孫原湘、席佩蘭夫婦の家を訪れて、共に文学に切磋琢磨していたという消息を語っている。歸懋儀は席佩蘭と同じく常熟の出身であり、同じく袁枚の女弟子でもあつたため、互いに親近感を抱いていたのであろう。

歸懋儀は五十代に至るまで倦むことなく詩を書きつづけたが、蘇州に客寓している間に龔自珍にも出会っている。嘉慶二十一年（丙子、当時二十一歳だつた龔自珍は、歸懋儀（五十一歳）の詩才を李白になぞらえ、彼女に会えた喜

びと彼女に対する崇敬の気持ちをも「百字令（蘇州晤歸夫人佩珊、索題其集）」詞に綴った。その下半闕には次のように述べられている。

人生才命相妨、男兒女士、歴歴俱堪數。眼底雲萍才合處、又道傷心羈旅（夫人頻年客蘇州、頗抱身世之感）。

南國評花、西州弔舊、東海趨庭去。紅粧白也、逢人都說親緒（夫人適李、有李青蓮之目）。

（人生、才命の相妨ぐるは、男兒女士、歴歴として俱に數つるに堪う。眼底、雲と萍と才めて合する処にて、

又、傷心の羈旅を道う（夫人、頻年、蘇州に客たり、頗る身世の感を抱く）。南國に花を評し、西州に旧を弔

い、東海に庭を趨り去く。紅粧の白や、人に逢えば都て親しく睹ゆと説かん（夫人は李に適し、李青蓮の目

有り）。

その後も二人の風雅な文学的交際は続けられた。龔自珍の歸懋儀の詩に対する傾倒ぶりは「寒夜讀歸佩珊夫人贈

詩、有刪除蓋篋聞詩料、湔洗春衫舊淚痕之語、憮然和之」（嘉慶二十五年の作、龔自珍全集、第九輯）という詩題を見た

だけでも十分知ることができよう。多くの有名な男性文人に注目された歸懋儀は六十五歳ごろ亡くなった。陳文述は

彼女の清冽な生涯を偲び、惻々たる悲痛な感傷を「輓歸佩珊夫人」（頤道堂詩選、卷二十七）に綴っている。

寒女神仙謝自然、青冥鸞鶴去如烟、殘山賸水江湖夢、斷粉零脂翰墨緣。桃李穠華留小影、蓬萊清淺感流年、何

人解序弦歌集、一曲蒼涼話水天（寒女の神仙、自然に謝す、青冥の鸞鶴、去りて烟の如し、殘山賸水、江湖の

夢、斷粉零脂、翰墨の縁。桃李の穠華、小影を留め、蓬萊の清淺、流年に感ず、何人が弦歌集に序するを解せ

ん、一曲の蒼涼、水天に話らん）。

第七句「何人解序弦歌集」は、『史記』卷四十七「孔子世家」の典故によるものである。「聞孔子在陳蔡之間、……、

圍孔子於野、不得行、絕糧、從者病、莫能興、孔子講誦弦歌不衰」（聞くならく、孔子、陳蔡の間に在り、……、

孔子を野に囲み、行くを得ず、糧を絶ち、從者病み、能く興つもの莫し、孔子講誦弦歌して衰めず）と、陳蔡の厄

に遭った孔子は、苦難の中でも学問を講習し続けたことを言っている。この詩は、生活の糧を求めるために長年四

方を漫遊し、女弟子に学問を講習し続け、困窮した境遇を生き抜いて、ひたすら文学の道に自己を捧げた歸懋儀の

生涯を見事に描写したのと言えよう。

おわりに

以上、閨秀詩人歸懋儀の生涯のあらまじと、師を求める経過、江蘇、浙江を歴訪する折々に出会った文人たち、或いは応酬した作品などについて、その一端を述べてみた。

彼女は、まず地縁によって李廷敬の門下に入り、それから李廷敬の紹介で袁枚と知り合い、主情的文学の真髓を学び取ったと思われる。客旅の途中で、江南地方の代表的な文人陳文述、孫原湘、龔自珍と交遊することによって、己の文学を新たに練り上げていった。彼女が生涯二人の先生に師事できたのは、清乾嘉期における男性文人の間に、師を求め意欲的に知識を吸収しようとする女性を積極的に支えていこうという気風が存在したからであろう。

文学をよくする夫李學瓚がいたのに、歸懋儀がなお金を稼ぐ必要に迫られていたのは、恐らく夫の不運と家の没落のためであろう。やむを得ず閨塾の師になった彼女は、文化水準の高い江南を拠点として、師から受け継いだ文学的主張を幾多の門弟に伝授しただけではなく、また「日従事於詞章、或作一跋、或賦一詩、藉博蠅頭微利」（日に詞章に従事し、或いは一跋を作り、或いは一詩を賦し、蠅頭の微利を藉博す）（寄映藜四叔父書、補餘尺牘）と自分の売文生活を披露している。

自己表現の手段として、また金を稼ぐ手段として、彼女は自分の才華をできるかぎり發揮し、精神的、経済的な自立を図った。長年家郷を離れた土地で執筆活動に従事し、その文才が多くの人に認められた彼女は、広い意味では職業的文人であると言える。さらに、明らかに夫よりも輝かしい文学的業績を持ち、なおかつ家庭を出て社会に参入し、経済を助けなければならなかった彼女たちの生き方は、儒家が定めたジェンダーによる男女の内外分業のあり方を転倒させたものと見ていいだろう。

そもそも、明末以来の商業活動の隆盛によって、都市は発達しつつあったのだが、清の乾嘉期に入ると、経済的先進地域である江南では貨幣経済がより一層浸透し、社会の様々な面で儒教を中心とする旧秩序は大きく揺らいでいた。そして、女性の文芸世界への進出が急速化するに伴って、男勝りの才女は文壇で活躍し、女性の手になる男

性との競争意識が込められた文学作品や言論も数々書かれた。幅広い教養を身につけた清の閨秀詩人たちの多くは、巧みに儒教的道徳に従いつつも、一方、巧みにそれに抵抗してもいた。男女の「内」と「外」の境が明末以前より曖昧になるに至ったのは、やはり以上のような社会的、文学的背景と大きな関わりがあるのではないかと思われる。何とか自分の力で生き抜こうと試みた歸懋儀の境遇は、ジェンダーによる制限や不満を痛感していた陳文述の女弟子吳藻と汪端にはよく理解されていた。歸懋儀も特に女性の欲望、才華を顕彰する吳藻の『喬影』と陳端生の『再生縁』に強い興味を持っていた。彼女はこれらの文学作品に題詞を寄せることで、自分の抱いている苦悩や恨みを晴らすことができたばかりでなく、女としての自覚をも高めていくことができたように思われる。

ところで、清代における歸懋儀の文学的な評価はいかなるものであろうか。陳文述は屈秉筠『韞玉樓集』に寄せた序文において、屈秉筠、席佩蘭の後に続き「歸佩珊之耀艷温恭、英華彌縟、或冠衆人於群玉、或標冷艷於遺珠」(歸佩珊の耀艷温恭、英華彌いよ縟にして、或いは衆人を群玉に冠し、或いは冷艷を遺珠に標す)と歸懋儀への賛辞を惜しまない。要するに、歸懋儀は席佩蘭、屈秉筠と並び称され、常熟出身の重要な女流詩人として取り上げられている。衆多の袁枚の女弟子の中で、道光年間まで文壇で活躍し続け、更に詩詞以外に説唱文学にも深い関心を示したのは、歸懋儀のみであろう。彼女は汲めども尽きせぬ泉のような創作力を以て、生涯に千首以上の詩を作っている。そこには当時の文学者との交流の痕跡、知的女性の暮らしぶりなどが、歸懋儀ならではの鋭い視点で生き生きと語られている。その歴大な業績は清代女流文学史に確かな一歩を記したものであり、当然、それに相応しい正当な評価が与えられるべきであらう。

注

(1) 洪亮吉『更生齋詩續集』巻一に「再跋佩珊女史繡餘詩草」があり、注に「客冬承親繡荷囊及詩筒見寄」とある。

(2) いま我々が入手しうる通行本の袁枚編『隨園女弟子詩選』には、歸懋儀の詩が収録されていないと見られてきた。

しかし、筆者がこれを上海図書館所蔵の『繡餘續草』と対照したところ、『隨園女弟子詩選』巻五に収録された王倩

の詩のうち、何と二十題、三十八首の内容が『繡餘續草』のものとは全く同じであった。そのため本稿では、歸懋儀の生涯を考察する中では、これら重複する詩を取り上げていない。一体なぜこのような問題が生じたのか。この版本上重要な問題についての究明は、他日を期したい。

- (3) 『隨園詩話補遺』巻五の三十六に「松江李硯會刻其亡姐一銘心敬及子婦歸懋儀佩珊二人詩、號二餘集、曹劍亭給諫爲之作序」とある。

- (4) 施淑儀『清代閨閣詩人徵略』巻五に「楊鳳妹、……、上海李心耕室、有鴻寶樓詩稿」とある。

- (5) 歸懋儀『繡餘詩餘』に付された李廷敬の詞「壺中天」の内容による。

- (6) 胡文楷『歷代婦女著作考』書名索引による（鼎文書局出版 一九七三年）。

- (7) 歸懋儀『繡餘續草』に「讀小倉山房詩集」がある。

- (8) 不櫛書生とは女子で文学に通達している者を称誉する語である。唐・朱揆『諧噓錄』に「關圖文有妹能文、每語人曰、有一進士、所恨不櫛耳」とある。

- (9) 陳文述『西泠閨詠』巻十六「花簾書屋懷吳蘋香」に「嘗寫飲酒讀騷小影、作男子裝、自填南北調樂府、極感慨淋漓之致、託名謝絮才、殆不無天壤王郎之感耶」とある。

- (10) 陳文述『西泠閨詠』巻十四「兼葭里懷歸佩珊」に「佩珊：往來江浙為閨塾師、若黃皆令、卞篆生也」とある。また陳文述『頤道堂詩選』巻二十七「輓歸佩珊夫人」詩の注に「華芸卿、黃蘭卿、蕙卿皆夫人詩弟子」とある。

- (11) 黃媛介に関しては梁乙真『清代婦女文學史』を参照（台湾中華書局出版 一九七九年）。また、（美）高彦頤著、李志生譯『閨塾師・明末清初江南的才女文化』第三章にも詳しい論述がある（江蘇人民出版社 二〇〇四年）。

- (12) 『自然好學齋詩』の管絃の序文による（施淑儀『清代閨閣詩人徵略』巻八 鼎文書局出版）。

- (13) 徐世昌『大清幾輔先哲傳』に「李廷敬、字敬叔、一號寧圃、味莊。滄州人。……乾隆三十八年應天津召試、欽賜舉人、四十年乙未成進士。……、歷江蘇江寧、蘇州知府、擢蘇松太道。時與吳錫麒、袁枚、王文治、祝德麟、洪亮吉、陳廷慶、趙懷玉、何琪、林鏡、陸繼輅輩以詩文相雄長」とある。

- (14) 袁枚に与えた李廷敬の詩は『續同人集』に「過訪類」「初至隨園」「生挽類」「和簡齋先生自挽詩」「送行留別類」

袁枚の女弟子歸懋儀の生涯とその文学

- 「移任雲間留別簡齋前輩」がある。洪亮吉『北江詩話』巻一に「李兵備廷敬詩、如三齊服官、組織輕巧」という。
- (15) 『繡餘續草』に「味莊師賜唐賢三昧集口占一絶」詩が残されている。
- (16) 蔡毅編著『中國古典戲曲序跋彙編』第三冊（齊魯書社 一九八九年）。
- (17) 『繡餘續草』に「隨園先生來海上、蒙味莊師道儀詩不置口、并命謁見官閣、因事不果賦謝」とあるのによる。
- (18) 『小倉山房詩集』巻三十七に「歸佩珊女公子將余擬重赴鹿鳴 瓊林兩宴詩以銀鈎小楷綉向吳綾 見和甘章、情文雙美、余感其意愛其才、賦詩謝之」が残されている。
- (19) 袁枚の女弟子駱綺蘭は同時に三人の男性文人に師事している。拙稿「閨秀詩人駱綺蘭小伝 清乾嘉期における一人の生き方」を参照（『九州中國學會報』第三十七巻）。
- (20) 合山究「明清時代の女性文芸における男性志向について 「巾幗の氣」の除去と「鬚眉の氣」の獲得」を参照（『九州中國學會報』第四十二巻）。
- (21) 龔自珍「李復軒秀才學璜惠序吾文、鬱鬱千餘言、詩以報之」詩に「君配歸夫人、著詩千餘篇」という注がある（『龔自珍全集』第九輯 上海古籍出版社 一九九九年）。